

イギリス人のバランス感覚について

——小説の歴史を通して——

The British Sense of “Balance”

——Through the History of Their Novels——

北 崎 契 縁

I

阿部謹也は『西洋中世の男と女——聖性の呪縛の下で——』という書物の冒頭部分に近いところで、ヨーロッパが分かるということがどのようなことであるかについてヨーロッパへ2回行った金子光晴のつぎの文章を引いている。

「春夏秋冬を二度も繰り返しているあいだに、わかっているつもり西欧が次第にわからないものになりはじめて、西欧人であることをつまらなさが異邦人の僕にもなるとなくわかるような気持ちになってきたのだ」／「彼らの（筆者注：西欧人）もっているささくれた心臓の肌ざわりには辛抱がならない」¹⁾

「わかっているつもり西欧が次第にわからないものになり」は、金子が初めて経験したわけではなく、すでに、明治時代には夏目漱石が、また高村光太郎が感じていたことなのである。むしろ夏目漱石は、また高村光太郎は、ヨーロッパのわからない部分を感じて「絶望」をしたのである。以上のように記していく阿部のペン先は、自身が歴史家であるだけに、ほんとうにヨーロッパがわかっているのだろうか、本当のところを見ていないのではないだろうか、と懐疑的になっていく。懐疑的というよりは、しっかりヨーロッパを捉えようとする真の意味での歴史家を目指したいという熱意のようなものが感じられるのである。そんな阿部は、つぎのような面白い質問を友人にしてみるという。

「日本にはヨーロッパを賛美している人、ヨーロッパが大好きな人がたくさんいます。私の親しいヨーロッパ研究者でも、『ほくはヨーロッパ文明と運命を共にしてもいい

よ』などと、酒を飲むとすぐいいます。しかしそれはヨーロッパのなかの文化なので
すか、文明なのですかと聞くと、文明に決まっているのです。……」²⁾ (傍点筆者)

要は、「文明」の世界には日本人も入れるのだが、「文化」の次元となると、入りきれない。しかし、本当にヨーロッパを理解しようと思えば、そこまで入らないと難しいと言っているのである。

そしてたとえば、ホーソーンの『緋文字』という文学作品の終わりの部分で、長らく分からなかったパールの父親が他にもない牧師のディムズデルであることが判明した後、主人公のヘスタ・プリンの、「私たちのしたことには、それなりに神聖なものがありました。私たちはそういう気がしていました。お互いにそういっていただけではありませんか。お忘れになったのでしょうか。」³⁾ ということばに阿部は注意を払っている。このようなことばがこの小説の中で発せられまでに、ヨーロッパ史は千数百年を要したのであり、ヨーロッパ古代から中世にかけて千数百年の歴史を、彼女つまりヘスタ・プリンのことばに収斂する形でとらえてみたいというのが私の主題であると、阿部は述べている。

このように『西洋中世の男と女——聖性の呪縛の下で——』を読んできたとき、筆者は二重の複雑な感情に囚われた。一つは、まず何よりも、今まで筆者が従事してきたロレンス文学研究が単なる「文明」の理解の範囲に留まっていたのではないか。本当にロレンスを理解しようと思えば、阿部の言うように、「文化」の次元にまで入り込まないと駄目なのではあるまいか。いま一つは、阿部の『緋文字』理解に力を得て、案外文学研究はロレンスを、ひいてはイギリスやアメリカないしはヨーロッパを本当に理解する上で格好の題材であるのではないかという思いも一方では強くなったきたのである。また、一つの文学作品なりその作品を書いた作家について一定程度調べていけば、案外、アメリカないしはイギリス「文化」の一定の理解につながっていくのではないかという思いがしてきたのである。

II

学生時代に指導教授から聞いたことであるが、イギリス人の家の屋根には必ず煙突が二本あるが、その理由をイギリス人に尋ねると、「一本では落ち着かないから」というのが答えであったそうである。この点について、教授がその後どのようなコメントをされたかは記憶がないが、筆者自身の脳裏にはずっと鮮やかな印象として今日まで残っている。

その後、1977年と1985年の二回にわたり、ロレンスの生地やその近辺に出掛ける機会を得てイギリスに行ったときも、先の指導教授のことばは頭のどこかに残っていた。煙突が

二本あるかどうか、いつも気に掛けるというのが筆者の殆ど習い性にならっていたからである。もちろん、全部の家がそうであるとは限らないことはすぐ理解できたが、一本でなく二本のほうが「落ち着く」というイギリス人の考え方は何となく分かるような気がした。実際、このように合理的には説明のつかないイギリス人の感覚の世界は、たとえば、車窓から広がる田園風景にも感じとられるものであった。つまり、産業の象徴とも言える「機関車」の轟音と、かたや放牧された牛や馬がゆったりと餌を食んでいるのどかな田園風景が何の矛盾もなく厳然として存在しているそのいわば二重性というか、そこから醸し出されてくる「落ち着き」の雰囲気は異邦人である筆者には強く感じとれたからである。

この車中体験は、やがてイギリスという国の他の様々な面にまで広がっていくこととなった。たとえば、政治・経済の面で言えば、かの有名なマルクスやエンゲルスといった人たちは、ロンドンやマンチェスターで活躍し、今でもロンドンの地に眠っている。またイギリスには、「シャドウ・キャビネット」⁴⁾という現実野党が存在していて、野党でも内閣を作り、必要に応じては政権を担当することがよくある。こういった二つの事例を見ても、イギリスには「バランス感覚」が存在しているという証拠になるといえる。資本主義の本家本元でありながら、エンゲルスと共にマルクスにロンドンで「共産党宣言」(1847年)を書かせるだけの感覚、保守派だけによる一党独裁政権ではなく、野党にもいつでも政権を渡して「バランス」をとろうとする感覚あるいは体質、こういったものはすべて先の煙突のイメージとどこかで繋がっているような気がしてならないのである。

ところで、「バランス」感覚とは、「対立概念」ということばでも捉えることができる。たとえば、山本七平は『比較文化論』の中の「ものの見方の差」という章で興味深い説を展開している。普通われわれは、西洋人は「二元論者」で、日本人は「一元論者」だというふうに教えられてきたように思われる。しかし、山本はそういった従来の考え方を真っ向から反転させている。

……そして彼らの言うような意味における対立概念というものが元来は日本人にないということです。ヨーロッパ人の場合ですと、なんでも一つのを対立概念においてとらえないと気が済まない。これは彼らの一つの原則みたいなものなんです。

ところが日本人は対立概念でとらえてないで、これを分けて、分立させて、規定してしまうんです。この分立と対立との差というのが非常につかみにくいものらしいんです。⁵⁾ (傍点筆者)

「つかみにくい」分立と対立の具体例として、国会というものを著者は持ち出す。

たとえば、人間というものを善悪の対立概念でとらえる。人間は一人なんですけど、

その“一”を善悪という対立概念でとらえる。国会は一つなんだけれども、それを与野党という対立概念でとらえる。で、対立概念でとらえうる間はそれが対象を確実にとらえており、したがってその対象は実在しているわけですが、とらえられない状態になったらそれはもう形骸化してなくなっている、という考え方です。⁶⁾ (傍点筆者)

ある対象を見た場合、与党つまり善玉、野党つまり悪玉という「分立」するとらえかたでは、本当に対象をとらえたことにはならない。むしろ対象はどんなものであっても、双方に善玉・悪玉の要素が備わっているのがものの真の姿であるという考え方である。したがって、善玉・悪玉の両面を捉えないかぎり、「神」も「議会」も“生きている”ことにはならないのである。

ともあれ、二つの対立概念で初めて対象がとらえられるというヨーロッパ人の意識は当然イギリス人の「煙突」の意識にも通底するはずのものである。(ロレンスが、ヨーロッパに絶望し、危機感を感じたのはヨーロッパ人にとって数千年来の共有意識である「対立概念」が崩壊していく現実をまのあたりに見たことにあると言える。このことは、当時の彼の代表作 *Women in Love* (1920) や、'The Crown' などのエッセイに明確に現われており、後程触れてみたい。)

そこでⅢ以降では、本論の主題であるイギリス人のバランス感覚、つまり「対立概念」の歴史を過去250年の間に書かれた代表的な小説をスケッチすることによって検証していくことにする。

Ⅲ

イギリス小説を理解するには様々な方法があるだろう。小説を社会学的な観点から捉えるやり方、直観的な印象批評に頼るやり方、文献づくめの歴史的批評、あるいは、「ニュークリティシズム」の方法による厳密な言語分析による観賞ないしは批評の方法など、ざっと思いつくだけでも種々様々である。しかし、筆者にとって例えば本学英米文化学科の学生相手にイギリス小説の世界を理解してもらおうと思えば、上記のような文学の専門家にだけ通じるような切り口ではなかなか難しいのではないかという危惧が多分にあった。無理は承知の上であったが、単純明快な、ことばを変えて言えば、一つの一貫したテーマを見いだして過去250年のイギリス小説を切っていくのも一つの方法ではないかと考えたのである。そうして遭遇したのが、『ジェーン・エア』の序文に書かれた C. ブロンテ自身の手になる手紙の一節であった。

「彼女（オースティン）は、上品ぶったイギリス人の生活の表面を奇妙なくらいうま

く描くという仕事を確かにしています。…人々が熱心に見つめ、巧みに喋り、自由に動き回る様子を描くことは彼女には向いています。しかし表には出ないが、激しく脈打ち、血が急ぎ立てるもの、目には見えないが生命の中心にあるもの、生あるものが避けて通ることの出来ない死というもの——こういった点を彼女は無視しているのです。…ジェーン・オースティンは本当に完璧で賢明な女性ですが、実に未完成で無感覚な（感覚がないというではありません）女性です。もしわたしのこういった考え方が異端であるとしても、わたしにはどうしようもないことなのです。」⁷⁾（括弧は筆者、傍点は原文のまま）

ここには、19世紀の女流作家の目にとまったイギリスという社会・文化の特徴が単刀直入に記されている。人間生活には欠かせないお喋り・観察といった生活の表面と生身の人間なら誰にも流れている血とその血の停止である死という、いわば生活の裏面への目配り。こうした目配りは、実はジェーン・オースティンが初めてではない。人間には二面性が具わっていて決して切り離せるものではなく、かえって「対立」しているのが事の真相であるという見方は、例えば、オースティンよりもさらに早い時期に活躍した H. フィールディングにも見られる。彼はオースティンのように正面きって批判はしていないが、明らかに意識して書いたといえる *An Apology for the Life of Mrs Sahmela Andrews* (1741)（『シャミラ』）という実に面白い作品を書いている。彼の批判意識の対象となった作家と作品は同時期に Samuel Richardson によって書かれた *Pamela, or Virtue Rewarded* 『パメラ——美德は報われる』（1740）である。

まず *Pamela, or Virtue Rewarded* から見てみよう。十五歳の少女パミラ・アンドルーズが、奉公先で小間使いとして仕えていた B 夫人の死後、夫人の息子 B 氏からしつこく肉体を求められるが、拒んだため、様々な迫害を受けるものの、最後には彼女の貞淑さが B 氏の心を動かし、二人はめでたく夫婦となる書簡体形式の物語である。この作品は、小説の条件である ①フィクションであること ②散文体 ③実生活に即しているものといった点を満たした最初の小説である。「貧しい生まれの美しい小間使いのパミラが、若主人のかずかずの誘惑をしりぞけて、純潔を守り通し、主人の非を悟らせ、ついにその正妻の座におさまる」という「淑徳の報酬」の物語は、言ってみれば、「説教」と「春本」の両刃の剣の効果を持っていることは明らかである。しかし、小説の冒頭にある「手紙一」と「手紙二〔手紙一の返事〕」を読んでみると、パミラという女性は素直で、両親の言い付けをきちんと守り、貞節そのものの鏡のような人物という設定がなされている。もちろん両親自体も女の「操」という点に最重点を置いているまことに理想の人物として描かれている。B 夫人の亡くなった直後、B 氏からお金をもらったり、親切なことを言われたりしたことなど一部始終をパミラは両親に報告している。その娘の手紙に対して両親は次のように答え

ている。

パミラへ——まえの手紙を見て、わたしもおっかさんも、ほんとうに、困ったことになったと思いました。…だが何よりも困ったことは、おまえがそんなに身分不相応な扱いを受けて、心得違いをしないかということです。…

わたしも長い手紙を書きました。が、もう一言します。貧乏で不運な目にあっているが、わたしたちは神様の御慈悲を信じて、まっとうに過ごしてきました。で、このまま曲がったことをしなければ、この世では恵まれなくても、来世は幸せになれると思っています。だが、わが子が操を失ったら、それこそ、どうしようもない悲嘆にくれて、すぐこの〈白髪をして墓にくだらしむる〉ことになるでしょう。⁸⁾

この後、彼女は様々な誘惑に遭遇することになるが、結局両親の言い付けどおり操を守り通す。要は、作者の意のままに、パミラはいかにもピューリタンのといえる道徳に忠実に生きていくこととなる。とはいっても、道徳はあくまで道徳であって、人間生活の「表面」上の辻褄をあわせるだけが関の山である。しかし、人間には目にははっきりとは見えないが、「裏面」で絶えず活動している血の働き、生と表裏一体であるはずの死の影を無視することは出来ないであろう。ここに、同時代の作家 H. フィールドिंगが登場する背景があったといえる。『パミラ』にも顕在していた「説教」と「春本」の「春本」の部分を明るみに引きずりだし、人生には両面が「対立」していることを強調しようとして作品を書いたからである。その作品名は *Shamela* (1741) である。

神の慈悲を信じ、操を守る生活を続けながら、ついには若主人 B と結ばれたのが『パメラ』であったが、実際にはこの娘、本名を「シャメラ=Sham=pretence=偽物」と言い、男を騙す手練手管にかけてはピカーである。貞節を旗印にはしているが、現実には若主人 Booby を平気で騙し、まんまと結婚する。またピューリタンの節約の精神などひとかけらもなく、毎日湯水のごとく金を浪費するあばずれ女として描かれている。もちろんことは娘だけにとどまらない。『パミラ』と同じように両親が登場するが、パミラの両親とはまったく対照的な存在である。このような親子の手紙のやりとりを次に見てみよう。

拝復、まあ、呆れたこと、娘がそこらに見えなくなったとき、母親ってのは自分の娘を捜しても、かまどの中までは決してのぞいて見ないものなのね。母さんは私がアーサー・ウィリアムズさんと乳繰りあって不始末を招いたと、私を責めるんだったら私はけっしてこれからはしないわ、でもお母さんのときだって……、でもこれ以上は申し上げませんことよ。⁹⁾…

可愛い我が娘よ、

なぜあなたは感情に負けてしまうのかしらね。…お前に愚かな罪に耽らないように忠告したのは、お前が前もって十分報いられるように手をうっておかねばならないことと、自分のよこしまな目的を遂げてしまえば、まず守る筈がない男の約束を信じてはいけないこと、ただそれだけを言うつもりだったんだよ。金持ちの馬鹿息子とお前がやりとりするのを見ていると、お前は自分をもっと巧く売り込まなくちゃ、とても誉められるもんじゃないし、ウィリアムズ牧師のような紳士が相手では、実際、何をか言わんやってこと。¹⁰⁾…

謹厳実直なパミラの両親に比べて、シャミラの両親はなんと破廉恥な人たちだろう。親も親なら、娘も娘である、という非難が当然予想される。しかし、そこにこそフィールディングの意図するところがあったというべきであろう。ピューリタンのな徳の衣装の下で見えなかった人間の「裏面」性、道徳だけではやっていけない人間の「不道徳」性、「上半身」と「下半身」が「対立」してこそ、生きた人間を捉えたことになるというバランス感覚の存在を『シャミラ』という作品を提供することによって、フィールディングはイギリス社会に訴えた作家と考えられる。

以上、小説の発生期である18世紀に出た対照的な二人の小説家の作品を比較してきた。そうして言えることは、一人の作家が人間のある一面を描くと、別の作家が他の一面をカバーして描き、そうして初めて「全面的真実」¹¹⁾といわれる人間実存の姿が浮かび上がるという「文化」が、イギリス社会には敵として存在しているように思われるということである。この仮定が妥当かどうかについて、以下19・20世紀にまで範囲を広げて検討してみたい。

IV

19世紀について、前半と後半期に分けて検討してみよう。前半期の作家としては、Jane Austen と Charlotte Brontë を取り上げてみたい。まず J. Austen の代表作の一つ *Pride and Prejudice* (1811) から見てみよう。彼女自身は1775年に生まれているので、同年にはアメリカの独立戦争、14年後にはフランス革命が起こっている。またいわゆる産業革命と呼ばれる一大社会変革が当時のイギリス社会にさまざまな影響を与えていた時代背景があったことは記憶しておくべきであろう。しかし、実際には、彼女の生涯は不思議なことに平穩無事そのものの生活であった。彼女の作品の舞台となったのがイギリス南部の田舎町や村といった限定された場所であったことがその最たる理由である。

物語の筋はいたって簡単である。Jane と Bingley, Elizabeth と Darcy という二組の男

女が、自らの、また周囲の誤解や脇道などの曲折を経て、結局はめでたく結婚にまで漕ぎ付けるといふ筋だてである。登場人物は地方の名家である紳士階級の人々、牧師、軍人といたった人々である。ベネット夫妻には5人の子供があるが娘ばかりであるため、財産相続はいとこの Collins という牧師補に渡ることとなっている。そんな折りに、独身のお金持ちである Bingley が近所に移ってくる。彼は同時に二人の妹と友人の Darcy という男を連れてくる。Bingley とベネット家の長女 Jane はお互いに好意を抱く。一方の Darcy は次女の Elizabeth に引き付けられるが、生来の横柄な態度を見せたことで、彼女から嫌われる。以下二組の男女のうち、後者の Darcy と Elizabeth の関係に絞ってこの作品の特徴を捉えてみよう。

二人の関係は物語の冒頭よりぎくしゃくしてうまく運んではいない。しかし、彼女が Darcy の館をダービシャーに訪ねて以来、にわかに進展する。ところが、ここで再び邪魔が入るのである。Darcy の伯母にあたる Lady Catherine が自分の娘婿にと思っていた当の Darcy が Elizabeth との結婚の意向を持っていることに慌てて、彼女は自らベネット家に馬車で乗り込んでくる。もちろん、今まで紆余曲折を経て Darcy への思いが強くなっていた Elizabeth は夫人を適当にあしらって帰らしてしまう。その直後、Darcy はついに二度目の求婚を彼女に向かってする。

…「それにしても、あなたはりっぱな方だから、まさかぼくをからかうようなことはなさいませぬ。だから、もしあなたの気持ちがですよ、いつかの四月のままでしたら、この際はっきりそう言ってください。ぼくの気持ちや願いは、ちっとも変わっていませんが、それでも、もしあなたの一言次第では、もう永久にこのことは、口にしないことにしましょう」

彼の立場を思ってみると、エリザベスの気持ちは、いよいよ苦しく、いよいよ不安になるのだった。とうとう思い切って口を開いた。そしてさっそく、あまり流暢ではなかったが、とにかく彼女の気持ちは、彼の言ったとき以来すっかり変わった。したがって、いまの彼のことは、深い感謝と喜びとをもってお受けすることができる、という意味のことを述べた。…もしそのとき、二人の視線が合っていたならば、きっとエリザベスは、彼の顔にあふれた心からの喜びの表情、それがいかに彼らしいものであったかに、気が付いていたに違いない。見ることはできなかったが、聞くことはできた。そして彼は、いかに彼女が、彼にとって大事な存在であるかを語り、彼女もまたそれによって、彼の愛が、刻一刻に貴重なものに思われてくるのだった。¹²⁾

「愛の告白」という重大な時機にあっても、「愛」は単なることばだけの経験にすっかり変形されてしまっている。ここでは個人の喜びよりも社会の規範が、また愛や恍惚の状

態を描くよりも、当事者の「意識」をしっかりと磨ぎすましていこうとする作者の意志のようなものが感じられる。確かに、Charlotte Brontë が言ったようにイギリス人の生活の表面、つまり「人々が熱心に見つめ、巧みに喋り」という表面上の姿は巧く描かれている。しかし、「理性」よりも「情熱」が、愛にはつきものの激しい「不安」なり「苦しみ」がどこか欠けているという点は否めない。そしてこの点にこそ、Brontë は不満を感じ「全面的真実」のもう一面を描くべく *Jane Eyre* (1847) を書いたのである。

Jane Eyre は、孤児であった Jane が叔母のリード夫人のもとにあづけられ苛酷な待遇を受けるところから始まる。その後、ローウッド学院を卒業した Jane は自活の道である教師の職を求めて Thornfield という屋敷に入り、当主の Rochester と恋に陥る。やがて二人は愛を实らせ結婚式を挙げようとした矢先、Rochester には妻のあることが判明する。重婚を避けるべく Jane は即座に Rochester のもとを去るが、後程再会する。しかしこの時彼は、家が焼け落ちるとき妻を助けようとしてことがもとで盲目となっていた。それでも二人は長い曲折を経てついに結ばれる。

以上が *Jane Eyre* の粗筋であるがこれだけでも、*Pride and Prejudice* にはなかったドラマが存在することが見て取れる。そこで次にこの作品で有名な箇所を引用してみよう。それは Rochester との結婚に失敗して三日三晩荒野を彷徨った Jane を救ってくれた Saint John という血縁にあたる牧師補に、妻としてインド行きを再三強要されるが彼女は全然気が進まない。そしていよいよインド行きの日が近付いたある日、彼は再度 Jane に結婚を迫る。その夜のことである。彼女は不思議な声を聞く。

家のなかには静まりかえっていた。セント・ジョンと私だけで、他の人たちは皆寝てしまったからだと思う。一本だけの蠟燭は消えかけていた。室内は月光で溢れていた。私の心臓は速く激しく打ち、その鼓動が聞こえていた。突然それが止まった。心臓を貫き、たちまち頭から全身の末端まで伝わった言い表わせないような衝撃を受けたためであった。…神経は何事かと起き上がった。目と耳は待ち構えた。筋肉はそのあいだ骨の上で震えていた。

「何を聞いたのです？ 何を見ているので？」とセント・ジョンが聞いた。私は何も見なかった。ただ、どこかで叫んでいる声を耳にした――

「ジェイン！ ジェイン！ ジェイン！」ただそれだけであった。¹³⁾

「ジェイン！」という叫び声は、部屋の中でも家の中でも、庭の中からはたのでもなかった。また、「空中」から、あるいは「地中」から発したのでもない。むしろ、この場合は愛する者同志が呼び合うテレパシーのようなものと考えるとよく解る。まさに著者の Brontë が言っている「表には出ないが、激しく脈打ち、血が急ぎ立てるもの」を描いた

ものといえよう。さらに Jane という女性は、作者の代弁者として Jane Austen に欠けていた面をきちっと捉えていることが、たとえば「彼（セント・ジョン）はほとんど愛していると言っても言ったふうに私を腕に抱えた。（わたしはほとんどと言う——わたしにはその違いが解る——愛されるとは、どういうものであるか、わたしには解っていたからである。…）」¹⁴⁾（括弧は筆者、傍点原文イタリック）という箇所から理解できる。というのはここには「愛」と「義務」の区別がきちんとでき、なおかつ「愛」に生きようとする Jane の明確な姿勢が出ているからである。ともあれ、*Jane Eyre* の出現は、*Pride and Prejudice* に欠けていた面を補い、かくして「全面的真実」を把握しようというイギリス社会の伝統つまり「対立」世界を捉えようとする伝統は生きて働いていることになる。

（未完）

註

- 1) 阿部謹也、『西洋中世の男と女——聖性の呪縛の下で——』（筑摩書房、1991）p. 25.
- 2) 同掲書、p. 25.
- 3) 同掲書、p. 13.
- 4) 「影の内閣」：最近、日本の社会党が「影の内閣」という言葉を盛んに使うようになったが、おそらくその原語は‘shadow cabinet’であろう。しかし、日本語で「影の内閣」というといかにも「影」の存在でとても保守党・自民党に代わる力がないことをわざわざ暴露しているようで、可笑しくてしょうがないのは筆者だけであろうか。まさに「影の内閣」は、「文明」の輸入ではあっても、「文化」の輸入では決してないのである。もっとも、二大政党が拮抗した力を持って対立していることで、一国の経済という面から見ればマイナスになることもありうる。この辺のことは、イギリス経済に明るい森嶋道夫は次のように書いている。「私はイギリスが経済的にうまく行かないのは、イギリスが二大政党の国で、政権が数年ごとに二つの政党の間を右往左往するからだだと思います。もちろんこれだけが原因ではなく、他にもいろいろ原因がありますが、それらの諸原因の中でも、この民主的政権交替は、非常に大きいマイナスの影響を経済に与えていると思います。…」（森嶋道夫、『続 イギリスと日本——その国民性と社会——』岩波新書、1990）、p. 119-20.)
- 5) 山本七平、『比較文化論の試み』（講談社学術文庫、1991）、p. 86.
- 6) 同掲書、p. 87.
- 7) C. Brontë, *Jane Eyre* (ed.) by Q. D. Leavis, ‘Introduction’, pp. 10-11. (Penguin Books, 1966) .
- 8) リチャードソン・スターン、海老池俊治・朱牟田夏雄訳、『パミラ、トリスタム・シャンディ』（筑摩書房、昭和56年）、p. 6.
- 9) 和田敏英、『イギリス18世紀小説論』（開文社、昭和62年）、pp. 232-33.／能口盾彦訳、『シャミラ』（朝日出版社、1985）、pp. 33-34. なお、「かまど」（原文：‘the oven’）は18世紀時には女性の外陰部を暗示する、という註が能口訳には付いている。
- 10) 同掲書、pp. 233-34.

- 11) Aldous Huxley, *Music at Night and Other Essays* (Chatto & Windus, 1960), 'Tragedy and the Whole Truth' (pp. 3-18) 参照。／ハックスレイの芸術に対する態度は、「純粹化」の反対者である点に特徴がある。「すべての思想、感情は相互に依存している」という考え方がそれである。たとえば、先の 'Tragedy and the Whole Truth' の冒頭、ホーマーの *Odyssey* (『オデュッセイ』) を引いて次のように論じている。オデュッセウスは部下の6人の勇士を女の怪物スキュラに食い殺されてしまうという恐ろしくも悲しむべき航海を経た後、彼も含めて生き残った部下たちと共に陸に上がり、晚餐をとる。『オデュッセイ』の12巻目はこんな言葉で結ばれているとハックスレイは引用している。'When they had satisfied their thirst and hunger, they thought of their dear companions and wept, and in the midst of their tears sleep came gently upon them.' そしてこの直後ハックスレイは「全面的真実」という鍵ことばを使ってホーマーの *Odyssey*こそ、数少ない全面的真実を扱った作品だと評価している。'The truth, the whole truth and nothing but the truth – how rarely the older literatures ever told it? ... Of the great writers of the past incredibly few have given us that. Homer – Homer of the Odyssey – is one of those few.' (下線は筆者)と締め括っている。
- 12) 中野好夫訳、『自負と偏見』(上・下)(新潮文庫、平成元年)、p. 258-59.
- 13) 遠藤寿子訳、『ジェイン・エア』(上・下)(岩波文庫、1989)、p. 338-39.
- 14) 同掲書、p. 338.